

## 研究授業「教育学原論」の実施

田 中 崇 教\*

### Enforcement and reflection of an open class “Pedagogy”

Takanori Tanaka

#### 要約

本稿は平成22年（2010年）度第1回保育学科研究授業の実施報告である。当該授業科目（教育学原論）における本時のテーマを「日本における近代学校教育制度の成立」とし、前講までの復習を適宜意識的に取り入れながら、授業者は講義を進めた。その他、受講学生の理解を高める為の授業上の工夫も「春日の里の知恵袋—保育学科のティーチング・ティップス」を参考に行った。

キーワード：授業公開、研究授業、教育学（教育原理）

#### (Abstract)

This paper is the record of an open class performed in the Department of Early Childhood Care and Education in the Takamatsu Junior College on May 31th, 2010. The main topic of this lecture was origins of modern schools in the transformation from Tokugawa to Meiji Japan. Every time, in the lecture spends time on the review. For students systematically understand the theory of the education. This plan refers to “Teaching tips” in the Department of Early Childhood Care and Education in the Takamatsu Junior College.

Keyword : open class, lesson research, Pedagogy.

---

\* 提出年月日2010年11月30日、高松短期大学保育学科講師

はじめに

本稿は、平成22年度第1回保育学科研究授業「教育学原論」の実施報告である。

保育学科では、平成21年度にこれまでに実施した研究授業の蓄積に基づき「春日の里の知恵袋—保育学科のティーチング・ティップス」を作成・公開した。この資料を参考に、授業者（筆者）も様々な点で授業改善に取り組みつつ、本研究授業を迎えた。

## 1 研究授業の日程

### (1) 研究授業

日 時：平成22年5月31日（月）第1校時（9:00–10:30）

場 所：本学2号館 2105-6 講義室

科 目：教育学原論

担 当：田中 崇教

受講生：本学保育学科1年次生（79名）

### (2) 授業検討会

日 時：平成22年5月31日（月）第5校時（16:20–17:50）

場 所：本学2号館 2201 演習室

## 2 「教育学原論」の基本的性格

保育学科において「教育学原論」は、「幼稚園教諭2種免許（「教職に関する科目」区分内における「教育の理念ならびに教育に関する歴史及び思想）」と「保育士資格（「保育の本質・目的の理解に関する科目）」取得のための必修科目である。さらに、保育学科では「卒業」必修科目、そして「幼稚園教育実習を受けるにあたって事前に履修しておくべき」科目に位置づけられる。とりわけ、教育における基礎的・原理的な知識を教育実習前に習得すべきとのカリキュラム設定によって、この科目は1年次前期に、講義形式で開講される。

高松短期大学「履修ガイド（履修の手引・シラバス）」（2010年）で授業者は次のように

教育学原論を紹介した。

教員免許状を取得する以上は、教育に関する基礎知識をもっていなければなりません。これは当然ですが、さて、「教育とは何か」という問いには、様々な意見を言う人があり、様々な意見の一つが「確かにそうだ」という点と「???」と思う点を含んでいて、私たちは混乱してしまいます。

そこで、この講義では、みなさんが「教育とは何か」という問いを考えるヒントとなる基礎的な知識の獲得を目指して授業を進めて行きたいと思います。

実習園で「先生と呼ばれる人間に」ふさわしい基礎知識（教育の理念並びに教育に関する歴史・思想）を習得し、また先生と呼ばれるにふさわしい学習態度を身につけること、これらが1年次前期という時期に行われる教育学原論で掲げる目標である。

なお、教育学原論では使用テキストは保育士養成講座編纂委員会（2010）<sup>1</sup>を使用する。

### 3 教育学原論における指導上のポイントー「春日の里の知恵袋ー保育学科のティーチング・ティップス」を参考にー

#### 3.1 受講生およびカリキュラムをめぐる現状

受講生は保育学科1年次生（79名）である。先述の通り、教育学原論は幼稚園教諭2種免許、保育士資格の必修科目、さらに保育学科の卒業要件等に位置づけられる。そのため、今年度も保育学科1年の全学生が受講した。

原則的に保育学科のカリキュラムは、2年間の学修において幼稚園教諭と保育士のライセンスを取得できるように編成される。裏を返せば、2年間で90単位取得という極めて過密な時間割が学生に強いられる状況にある。また、入学当初ということもあり、学生の学力を十分に把握できないまま、指導（授業）を進めていかざるをえない状況にもある。

#### 3.2 指導上のポイント

こうしたカリキュラム現状と学生の状況に鑑み、授業者は今年度の教育学原論での指導

---

<sup>1</sup> 改訂保育士養成講座編纂委員会編『教育原理 保育士養成講座第9版』全国社会福祉協議会、2010年。

上のポイント（重点課題）を教育学に関する「基礎知識の復習の重視」と「学習習慣の確立」に置いた。このポイント設定。施策検討には、2009年に編纂された「春日の里の知恵袋—保育学科のティーチング・ティップス—」を大いに役立てた。

### 3.2.1 基礎知識の復習の重視

「教育学に関する基礎知識の復習の重視」とは、その都度の講義内容における重要用語や核心となる考え方を、意図的に授業内あるいは次講・次々講において多彩な教材を用いて繰り返し説明する試みである。各講の講義内容を「縦断的・系統的に」理解させる試みである。内容説明をその時の一回で終わらせるのではなく、言葉を変えながら説明を繰り返すことによって、あるいは次講や次々講で系統的に説明し直すことによって、学生らにはそれぞれのレベルで理解をさらに深めることが可能になる。同時に、何らかの事情で欠席せざるをえなかった学生の自己学習のフォローアップも可能になる。

従来、授業者は板書明示を通して、重要語句や講義内容の核心に迫るエッセンスを受講生たちへ届けていた。しかし、一回きりのノート記入作業で学生にその内容を「誠実に」伝えていたとは言い難い。むしろ、近年の学生の学力状況から学生の講義内容理解を深めるためのさらなる工夫が求められるのではないか。こうした反省から、様々な手段を講じて「説明の繰り返しによる徹底」という着想に至った。

繰り返しの説明をする際に、講話のみを用いる手段は冗長になるため、避けたい。そこで授業者は「テキスト（への線引き）」、「パワーポイント」、「授業者作成による補助プリント」これら三つのメディア教材をその都度提示しながら、説明する。そして、説明を行う時は、事前に作成する指導案において検討する。導入時、展開時、終末時のいずれかに組み入れるのだが、毎回の講義内容によってその都度最も適切な時間帯に設定することを心がけている。

ここで特徴として確認されることは、テキスト・補助プリント・パワーポイントが復習時に用いられている点である。もちろんパワーポイントを、必要に応じて講義中に使用する時もあるが、その際には二種類を準備する。ここで付記しておくが、教育学原論で使用するパワーポイントは、授業内容の重要なエピソードや、その内容の核心に迫るための「しかけ」という役割を担わせているため、10-20分間程度の説明を有する内容構成である。

### 3.2.2 学習習慣の確立

1 年次前期に保育学科全学生が受講する教育学原論は、学生に「学習習慣を確立させる」ため、板書された内容を教員配布の「授業ノート」<sup>2</sup>に記述し、毎時授業終了後に提出することを課題として課す。この授業ノートはA4版の用紙から成る。用紙の片面は、罫線を入れた「講義記録用面」であり、もう片面は参考資料や課題シートなどが印刷された「資料・課題用面」である。そのため、教育学原論という講義の主たる教材は、板書であり学生たちが記述する「授業ノート」である。

授業者は指定テキストの内容を精選し、必要に応じて補足しながら講義内容を再構成する。この再構成された内容は板書を通して学生たちに伝達する。そして、受講生は板書内容等をノートに記述することにより、指定テキストをより精選させた内容を学習することができるのである。そのため、指定テキストなどは補助教材に位置づき、復習（確認）のためという役割を担うのである。このことは、単に指定テキストの内容がそのまま講義内容であるということの意味せず、場合によっては指定テキスト内容を越えた内容が板書に存在することを意味する。ゆえに学生は、毎時課題として提出しなければならないことと同時に、その都度の講義を聴講（記述）し損じないことに注意する必要がある。

このように教育学原論は、講義の聴講と板書のノート記述を主たる学習活動とするため、逆を言えば、板書（計画）に注意を払っている。とりわけ、復習時に学生の理解を円滑にするため、「内容に系統性を持たせる」、「内容の重要性を色別に提示させる」ことにこだわりを持つ。こうした、あまりにも「丁寧過ぎる」手法は、受講生に失礼なのではないかとの意見が教員からある。確かに、一理あるだろう。だがそれは、教育学の内容を一定「理解できている」側からの見解ではないだろうか。すなわち、受講生の現状に鑑みた時、受講生全てに「講義でノート記録を取る」習慣を確立させることを、1年次前期において定着させたい意図が、教育学原論にある。もちろん、最も大切なことは、「板書をノートに記述する」という学生の努力を視覚的に認めることが大切なことは言うまでもない。ここには教員のちょっとした工夫が必要になるだろう。また、受講生の中でも比較的理解の早い学生に対してのフォローアップも必要である。そこで、教育学原論では補助資料・参考文献授業ノート内に設けている。さらに、授業ノート内には質問欄を設け、任意で質問を受け付け、教員は回答する手法を取っている。この質問欄は思いのほか好評で、

<sup>2</sup> なおこの授業ノート記述を主たる学習活動におく（授業形式）は、授業者が担当する保育原理ⅠA（発達科学部子ども発達学科）、保育原理ⅠB（保育学科）においても用いられている。

毎時数名の受講生から質問が寄せられていることを補足しておく。

以上のようなノート記述を中心とした学習習慣の確立と併せ、教育学原論では「春日の里の知恵袋—保育学科のティーチング・ティップス」で見られる受講上のマナー指導にも取り組んでいる。

## 4 教育学原論の講義計画と本研究授業の概要

### 4.1 教育学原論の講義計画

教育学原論の講義計画は次のとおりである。ただし、学生の理解状況や進捗状況に応じて本学シラバス内容を修正した部分が若干ある。こうした修正については、学生たちに適宜連絡し了解を得ている。

第一講（4月12日）オリエンテーションおよび教育学の見方・考え方

第二講（4月19日）現在の教育における問題と対策

第三講（4月26日）教育の意義と目的①—教育の必要性—

第四講（5月10日）教育の意義と目的②—教育とは何か—

第五講（5月13日）教育の基礎概念と諸理論および歴史①

第六講（5月17日）教育の基礎概念と諸理論および歴史②

第七講（5月24日）教育の基礎概念と諸理論および歴史③

第八講（5月31日）日本の学校教育の歴史①：寺子屋から学校へ・・・本時（研究授業）

第九講（6月7日）日本の学校教育の歴史②：大正自由教育を経て総力戦体制へ

第十講（6月14日）日本の学校教育の歴史③：戦後の教育制度改革

第十一講（6月21日）日本の学校教育の歴史④：学習指導要領の変遷

第十二講（6月28日）日本の学校教育の歴史⑤：教育方法と教育評価

第十三講（7月5日）家庭教育のあり方

第十四講（7月12日）生涯学習の意義

第十五講（7月26日）全体のまとめ

### 4.2 本時の概要

本時は、「日本の学校教育の歴史」の第一回目であった。以下、時間区分等については

資料（本時指導案）を参照してほしい。まず導入では、前講までに学習した「教育の基礎概念と諸理論」の概要をパワーポイントによって確認した。コメニウス（J. S. Comenius. 1692-1670）からデューイ（J. Dewey. 1859-1952）に至るまでの近代教育学の諸理論を概略的に伝えることは可能であるが、学生の側に立てばそうした内容を理解することは決して容易ではない。そのため、前講までの内容（エッセンス）を説明しながら、本時の内容へとつなげ、学生の学習理解を円滑にする作業が必要になる。本時の場合、「欧米諸国において展開された近代教育学理論が日本の（学校）教育に及ぼした影響」という観点から、日本の学校教育整備の端緒を理解することが本時の主眼にある。

続いて、展開部分では学習のポイントを「江戸期の主な教育機関（藩校、寺子屋、郷学、私塾）から明治期には学校制度へ転換がなされたこと」、そして「この学校制度は国家政策（富国強兵）を背景にしていたこと」、これらに学習のポイントに置き説明した。さらには、その都度の時局と教育制度との間には結びつきがあることの補足説明も加えた。その際に授業者は、幕末期の武士たちが欧米諸国の先進的な文化や技術を習得する場面のVTR教材視聴を受講生に課した。この課題は、江戸期までの「旧体制・慣習などからの脱却」と「富国強兵」を目指した様々な明治日本の施策の一つに学校教育があったことを学生に確認させる意図があった。

終末部分では、近代国家の形成を目指す政策の一つに位置づけられる学校教育の整備には、欧米諸国の理念を導入し、他方で日本古来の伝統文化も反映させるといった時局的な特徴があることを確認した。この特徴は、当時の教授法や教育内容にも窺い知ることができるのだが、時間の都合上、本時は示唆にとどめ講義を終えた。

## 5 研究授業を終えての省察

本時の講義を参観していただいた教員の方々による授業検討会での発言内容や参観記録に従えば、「講義の内容構成」、「授業ノートなど教材準備・使用方法」、「環境構成」、「授業者の講話や板書」について、概ね肯定的な評価が確認される。パワーポイントを資料の提示・保存手段として使用することにより、紙媒体による提示・保存の煩雑さから解放されるとのご指摘を頂いた。検討会や参観記録を通じて、授業担当者当人では気がつかなかったこうした授業上の知恵（暗黙知）を改めて教えていただけたように感じる。

他方で、講義の改善に関するいくつかのご示唆を頂いたことも確認しておきたい。まず



一つ目は授業内容の難易度である。授業担当者の理解の範囲で具体的に述べれば「受講生の実情に鑑みた際、さらなる講義内容の精選が必要になるのではないか」といった意見である。確かに、理解上の消化不良を学生に起こすことは、避けなければならない。しかし、保育者を目指す学生にとって「必要最低限とされる知識の習得」を教育学原論は保証すべきでもある。また「行き過ぎた精選」は浅学化を引き起こす恐れがあることにも留意する必要がある。「浅薄な理解は、教育（保育）に対する見方／考え方の誤解を招く」という別教員の意見に賛同させていただき形式で、「理解し易さ」と「理解し難さ」との境界上に授業内容を置くことの重要性を改めて痛感した。ただ、そうであるがゆえに、授業担当者は前講・前々講からの系統的な復習を心がけているとも言えるのである。

二つ目は、授業担当者と受講生個々とのやり取りについてである。多くの学生を対象とした授業では、全ての学生と言葉を交わすことは非常に難しい。また、講義中にその際の代表として数人の学生と言葉を交わすことが、いわゆる「双方向型の授業」を志向しているともいえまい。例えば、授業担当者は講義中に、学生一人ひとりの様子を目でチェック、あるいは机間巡視しながら講話することを心がけている。そこには、「先生が自分を見ている」という意識を常に学生に持たせたいという意図がある。そうであってなおかつ、単なる言葉の交換にとどまらない授業中における「学生とのコミュニケーションのあり方」について検討する必要があるだろう。

三つ目は、学生の主体的な学びについてである。先述の通り、1年次前期の教育学原論は基礎基本の定着や学習習慣の確立を指導上の重点課題としたため、主体的な学びについてはほとんど考慮に入れていない。むしろ、そうした欲求は、2年次に授業担当者が再び担当する授業科目（保育原理Ⅱや保育環境論）で満たすことができるように準備している。ただ、今年度の学生の中にも1年前期において既に主体的な学習活動を授業時間外に試みる者も散見された。こうした自主的な学習活動への意欲が、全ての学生に芽生えるような手だてをさらに検討していく必要はある。今後の課題としたい。

## 6 おわりに

今回の研究授業は、本学における通常の研究授業期よりも早い時期（5月31日）に設定し実施した。この設定意図は、入学から2ヶ月程度を経た時期の学生の様子を公開することにもあった。参観教員からは普段の様子とは異なる学生の姿が確認でき、その意味でも



有意義であったという。教育学原論における例年の受講生（1年次生）の様子でいえば、この時期によりやく学習習慣の萌芽と、教室内に自然な落ち着きが確認されつつある頃といえよう。このように、研究授業期を通常とは異なる時期に設定する試みも時折あってもよいのではないだろうか。

また、「春日の里の知恵袋—保育学科のティーチング・ティップス」は、授業者自身の授業を構想する際に大変役立つ資料であった。また今回の授業参観者の方々から頂いた温かくもかつ鋭い意見を参考に、さらなる授業改善に努めていきたい。

本稿の最後に、研究授業にご協力いただいた受講生（保育学科1年次生）、ご参観いただき、授業検討会や参観記録で貴重なご意見をいただいた教員の方々、さらには今回の授業を録画記録するにあたり、ひとかたならぬご尽力を頂いた高橋英児氏をはじめとする教員養成コンソーシアム四国の方々に深謝の意を示す。

資料：

「教育学原論 第8講」指導案

授業者：田中崇教（保育学科）

主題：日本の学校教育の歴史①（日本の近代学校教育制度の構築—寺子屋から学校へ—）

ねらい：日本における近代学校教育（思想・制度・教育方法等）は、いかにして構築されてきたか、その足跡を理解する。

保育者に必須とされる基礎知識（教育学の基礎理論）の習得することを通して、学習習慣を身につける。

過程	学習活動	指導上の留意点	提示資料
導入	①前講までの学習内容の復習をする ・資料等で確認	○欠席学生に配慮し、要点を押さえた内容で語る。  ○ポイントは、明確に指示する。	テキスト 配布ノート資料 パワーポイント 赤ペンなど
展開	②本時のねらいを確認・板書する 「なぜ、明治期に学校整備が進められたのか」  ③説明・板書内容の要点（テキスト資料参照） ・江戸期における教育機関の理解 （寺子屋、郷学、藩校、昌平坂学問所など）  ④課題： 「ビデオ内の登場人物らはどのようなことを学んでいるのか」 ・ビデオ視聴	○以下の板書において、重要事項は色分けする工夫をとる。      ○単純な視聴ではなく、映像内容から記録を取る課題を立てる。  ○机間巡視	ノート資料など      ビデオ教材など

	<p>⑤説明・板書内容の要点（テキスト資料参照）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・明治期における近代学校教育の整備</li> </ul> <p>（「学事奨励に関する被仰出書」「学制」の頒布、福沢諭吉「学問のすすめ」など）</p> <p>&lt;本時の学習におけるポイント&gt;</p> <p>「古い体制からの脱却」と「近代国家の構築」</p> <p>* 立身出世、国民皆学（国家管理）、実学主義）、西洋文明・諸国に追いつき追い越す国づくり・人材の養成（富国強兵）</p>	<p>○一人ひとりの学生の様子を確認しながら、説明・板書することを心がける。</p> <p>= 「先生に見守られている」という意識づけ</p>	<p>ノート資料など</p>
終末	<p>⑥本時のまとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・資料等で確認</li> </ul>	<p>○要点の明確化</p>	<p>テキストなど</p>